

2017年4月2日(日)

説教:「わたしと共に目を覚ましていなさい」

聖書:マタイによる福音書26:36~46

弟子たちは、十字架に引き渡されるイエスを見て皆つまずく。何故、常に身近にいた彼らがイエスにつまずくのか？ 実は彼らは、イエスをまともに見ていなかった。イエスを“キリスト(救い主)”とは見ていたが、人間イエスとしては見ていなかった。それが、弟子たちのつまずきである。弟子たちは、神の子キリストを見、奇跡の出来事だけを見、人間イエスを見ていなかった。“神の子が苦しむことはあり得ない”“栄光に満ちた力で困難を乗り越えることができる”そういうキリスト像を強く描いていた。イエスが悪と戦うのであれば、一緒になって命を懸けてでも戦うという勇ましさはあった。実際にこの後、イエスを捕らえに来た手下にも弟子の一人が剣をぬき、耳を切り落としてしまう。弟子たちのキリストに対する信仰とはそういうものであったのだろう。

イエスは、「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と祈る。ここで言う「杯」とは、「十字架」のこと。「しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」と、祈りは変えられていく。イエスは祈りによってこの世の十字架へと向かって行った。…では、この世の十字架とは何か？

3月31日、日本政府は戦前の教育の基本理念を示した「教育勅語」を今後、学校の教材として用いることは有りうると閣議決定した。かつての教育勅語を復活させ、再び、皇民化教育を推し進めようと露骨に動いている。また、同じく31日厚生労働省は、3歳児以上を対象に、保育現場で国旗、国歌に「親しむ」と、初めて明記する保育所の運営指針を正式に決定した。文部科学省が同様の趣旨を幼稚園の教育要領に盛り込んだことを受けた見直しで、幼児教育の整合性が理由とのこと。2018年度から施行されていくと記す。この国は、露骨に戦前の国家教育へと向かう。

イエスは、「わたしと共に目を覚ましていなさい」と言う。イエスがこの世の十字架に向き合い、悲しみと怒りを露わし、苦しみ、行動し、もたえ祈られたことを、私たちは何に置き換えて十字架とする者か？ イエス御自身が、この世の、この社会の十字架に向き合ったことを、私たちは覚え、深めて行きたい。二度、三度と眠ってしまう私たちを起し、「立て、行こう」とおっしゃってくださる主のみ声を思い起こし、この世の、この社会の十字架に向き

合うことの使命を覚え、深めて行きたい。(神谷)